

大学生及び短大生のバス待ち行動の分析

総合人間科学部 人間心理学科

水田 恵三、田島 裕之¹

Psychological study on collective behavior about college students at a bus stop

Keizo Mizuta, Hiroyuki Tajima

(要約)

バスの乗車を待っている間に、割り込み行動が生じているのかを中心として、バス停留所の定点観察を行った。6日間にわたって行動をビデオテープに録画し、後日その行動を分析した。その結果42例の割り込み行動が観察された。そのほとんどは、先に並んでいる友人を探すかもしくは友人、知人に呼ばれて割り込むというものであった。簡単に言えば、友人とコミュニケーションを取るということが、他者への配慮、自己評価の低下などすべての行動や行動結果に優先するということである。そして、割り込み防止策としては、バス停に割り込み防止の看板などを掲げ、環境から改善していくことが提案された。

(目的)²

バスや電車のように公共の乗り物に乗車する際行列に横から割り込む行動のことを心理学では「社会的迷惑行動」と呼んでおり、社会規範からの逸脱が問題とされている。吉田たち(1999)によればこの社会的迷惑行動は、公共の場で同伴した子どもが騒いでいるのに止めさせようとしないこと、深夜に暴走すること、授業中に私語すること、ジュースを飲むこと、たばこや空き缶をポイ捨てすること、犬や猫などを放し飼いにするなどであるが、「並んで電車やバスを待っている人たちの横から割り込もうとすること」は自分が目にした場合でも、他人が遭遇した場合に予想される迷惑度でも最上位に「迷惑である」と認知されている。このように他者に対してはなほだ迷惑な行動であっても、大学、短大においては散見されるという話を聞く。また、岩淵・小牧(1997)は授業中の私語に対する規範意識に注目し、59%のものが私語を「絶対してはいけない」と考えている一方で、84.9%のものが「ついしてしまう」と回答していることを報告している。このように自分がされた場合や他者が行っているのを見た場合は甚だ不愉快に感じる行動を、不快であるのにもかかわらずなぜ人は行ってしまうのだろうか。

吉田(1999)によれば社会的迷惑行動を「行為者が自己の欲求を第一に考えて、他者に不快な感情を生起させるような行動」と定義している。であるとするならば、ここで社会的のような多義的な用語を使用するよりは「他者への迷惑行動」と限定的に用いる方が適切であろう。

1 mizuta@shokei.ac.jp
tajima@shokei.ac.jp

2 本研究は平成15年度尚綱学院大学共同研究費の補助を受けました

そして、吉田はその迷惑行動の理由として第一に、共同体の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったこと、第二に情報化社会への移行により、価値観の多様化が進み、個人判断が優先される社会になったことが挙げている。このような場合に、法律で迷惑行動を規制できない場合は社会規範、ルール、マナーという概念で規制されるのであろう。

この社会規範やマナーというもの（特にその不足の場合）を心理学的に個人の側から説明する際に、個人特性として吉田ら（1999）は社会的考慮、社会認識などの構成概念、さらに大坊（1994）や相川（1997）は社会的関係の充実を図るための社会的スキルの不足、吉田（2000）は社会志向性、公的自意識などの構成概念を用いている。さらに一般的には学生の常識の不足、地域性、性格なども揶揄されるようである。

しかし、このような行動を説明する際に留意しなくてはならない点は、人は他者の行動を説明する際には行為者の内的属性に原因を帰属させやすく、一方自己の行動を説明する際には自己以外の外的属性に原因を帰属させやすいということであり、これは基本的帰属錯誤と呼ばれる。Ross（1977）によれば基本的な帰属の誤りというのは、他者の帰属において、行為者本人の側の内的な原因が重視されすぎて、外的状況要因によって決定された行動からも、行為者の態度や性格などが推測されてしまう傾向をさし、非常に広範にみられる傾向であるためにこのようによばれている。これを他者への迷惑行動に当てはめてみると、他者その迷惑行動当事者の行動の原因を推測する際には、当事者の性格や規範意識のなさ、他者への考慮不足などに原因を求めやすく、一方行動の当事者は、何となく友だちが呼んだなど自己以外の事象に原因を求めがちである。

筆者たちは、現代の心理学においては行動の原因を性格や規範意識など心理学者が恣意的に考えた構成概念に求めすぎる傾向が強すぎると考えている。このことが無批判に行われるならば、物事を成し遂げる傾向が強い人は「やる気がある」からだ、援助行動をする人は「思いやりがある」からだ、他者への迷惑行動をする人は「モラルがない」からだ、などのトートロジー（言葉の言い換え）に陥ってしまうと考えている。

以上のように行動の原因を視野を広げて幅広く見ていく心理学の分野として、生態学的心理学が挙げられる。例えば生態学的心理学の中心人物である Wicker（1994）は、アメリカにおけるヨセミテ溪谷のバス停留所の混雑について研究している。これはそのバス停留所が混雑し、飛び乗りや、割り込みが頻発している現状を観察し、その改善を模索したアクションリサーチである。彼らは6週間かけて、2つのバス停留所での午後の遅い時間と夜間における観光客の乗車の仕方やその他の行動について組織的に観察して記録した。これらの結果、バス停留所での行動上の問題は、そこに居合わせる人々の数とともに増えるということであった。具体的にはバス乗車待ちの人たちの数が増えるにつれて起こりやすくなる行動は、他の客を押す、バスに飛び乗る、叫び声を上げる、騒々しい音を出す、飲み食いをするなどである。我々は、行動の原因としての個人の属性について必ずしも否定的ではないが、このように実際の行動をまず観察する等が必要があると感じている。

そこで本研究では、バス待ち行動という実際行動を観察しながら、その行動の原因について推測していく。さて、本研究で主に観察対象となるのはバス待ち行動における問題行動、具体的には他者への迷惑が想定される割り込み行動である。この割り込み行動とは国語辞典（三省堂 新明解国語辞典）によれば、「ルールを無視して、人の列や群れの中へ押し分けて無理に入り込む」とある。この場合のルールとは例えば一列に並ぶ等であらう。そして、列や群れと

いうものが既にあるということが割り込みの前提条件である。筆者たちのこれまでの観察から割り込みには3パターンあることが分かっている。図1のパターンは、すでに列が形成されており、特に乗車の混乱時に入口付近から割り込むパターンである。割り込まれた人と割り込んだ人との間でトラブルが生じることがある。図2のパターンは既に列が形成されているが、先に並んだ友人、知人を探してそこに割り込むパターンである。図3のパターンは列などがまったく形成されず、混沌とした状態の中で、割り込まれたのかも分からない状態の中で割り込み行動が生じる場合で乗車マナーの悪い高校生のいる駅で生じることが多いようである（高田、矢守1998）。

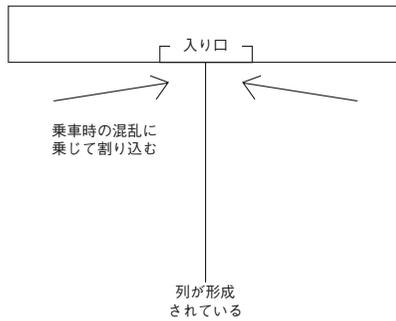


図1 割り込み行動第一のパターン

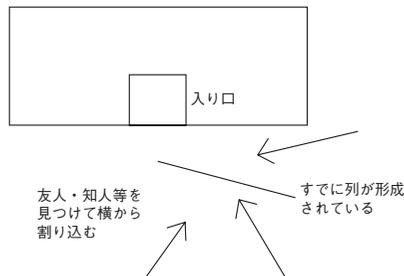


図2 割り込み行動第二のパターン

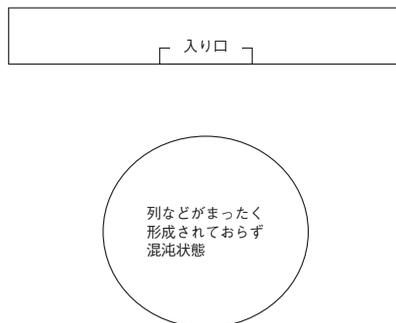


図3 割り込み行動第三のパターン

なお、本研究と平行して、県内の某女子大の学生168名に対して、割り込み及び被割り込みの経験、その理由（もしくは理由の推測）などを尋ねた。その結果割り込みをされることは対象者のほとんどが経験している。割り込みの動機はバスに座りたいから、前のバスに乗りたいから、と友達と一緒にいたいからと自ら述べるか推測をしている。周囲の反応も半ば割り込み行動を容認しており、ほとんど乗客が女子であることも原因であるという記述もある。また一般の人と同席の時には中年の女性から割り込みされたこともある。この大学は中学、高校とバスの乗り場が一緒で、年齢が低くなるほど割り込みをしやすいそうである。逆に言えば割り込まないのは成長の証しとも考えられる。他大学（共学でも）のバスでも割り込みが多く生じているということはよく聞き、大学間で割り込み率に差があるとは思われない。

(方法)

今回観察の対象となった場所は大学敷地内のバス停留所プールであり、概略図は図4に示される。

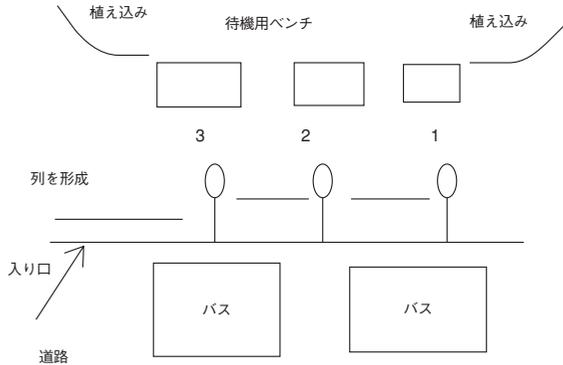


図4 観察対象となったバス乗り場

行き先別に3種類のバス停があり、それぞれのバス停の後に自然に列ができる。列の並び方、列の数等の指示は一切ない。バスは左方向から進入し、それぞれのバス停前に停車する。乗車者は左方向からしか並ぶことはできない。バスとは反対側に屋根付きのベンチが数個あり、最初に来た人はそこに座ることもある。ベンチの横には植え込みがあり、そこに座ってバスを待つ人もいる。

定点観察場所はバス停から見て左上方高台になっているところで、被観察者には気づかれていない。観察者はビデオでその様子を録画し、後日分析者2名で分析をした。観察期間は2003年12月中の七回、昼正午頃（1回）と午後4時過ぎに30分を目処にして観察を行った。観察時間は、12月10日夕方が40分間、12月11日昼は30分間、12月11日夕方は50分間、12月12日夕方は20分間、12月15日夕方は20分間、12月22日夕方は20分間で全体は180分間であった。

分析は2名で行い、割り込みの有無、割り込みの形態、どの列に並んだか等を記録した。

なお、本研究対象である大学は共学であるが開学1年後で1年生しかおらず、短大は全員女子である。被観察者への観察の許可は、その後の観察への影響を配慮して、未許可である。

(結果)

バス停に来た人がいずれかの行列に最終的に並んだときの位置に着目し、それが行列の最後尾以外であれば「割り込みをした人」、行列の最後尾であれば「割り込みをしなかった人」とした。また、行列の長さがビデオカメラの撮影範囲を越えてしまったために行列の最後尾に並んだかどうかを判断することができなかったが、後で行列に並んでいたことが確認できた人を「割り込みをしたかどうか不明の人」とした。

図5は、各観察日時における「割り込みをした人」、「割り込みをしなかった人」、「割り込みをしたかどうか不明の人」の人数を示したものである。

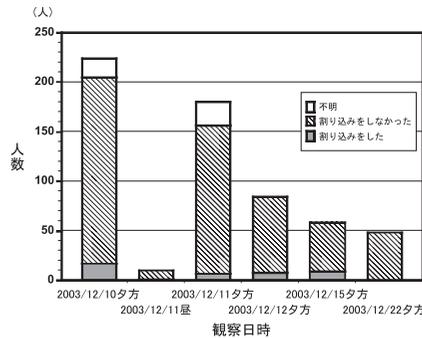


図5 割り込み行動等の分類

また、図6は、図5のデータから「割り込みをしたかどうか不明の人」を除外し、各観察日時の「割り込みをした人」と「割り込みをしなかった人」との割合がわかるようにしたものである。

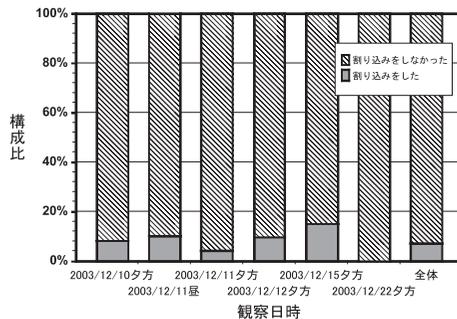


図6 観察日時別割り込み行動の有無

割り込み者率（「割り込みをした人」の割合）の最小値は2003年12月22日夕方の0%、最大値は2003年12月15日夕方の18%であった。また、6つの観察日時を合わせた全体としての割り込み者率は8%であった。

割り込み者率が混雑の程度によって異なるかどうかを調べるため、全観察時間180分を10分間から成る18のブロックに分割し、各ブロックにおける割り込み者率、および混雑度（1分間あたりのバス待ち行列に並んだ人数）を求めた。その結果を示したものが図7である。

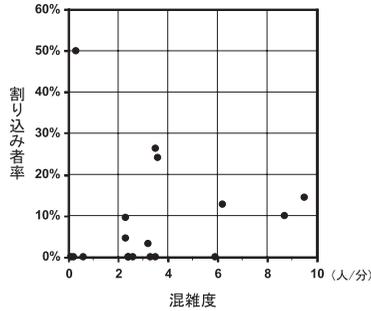


図 7 混雑度と割り込み者率との関係

混雑度が低いところで割り込み者率のばらつきが大きいのは、バス待ち行列に並んだ人数が少ないことによる必然的なものである。全体として混雑度が高いほど割り込み者率が高くなっているが、その両者の関係は弱いものであった。混雑度と割り込み者率について順位相関係数を求めたところ、Spearmanの ρ は.34、Kendallの τb は.23であった。

バスを待つ人数が増えるほど、バス待ち行列の最後尾に並ぶことが、バスの座席に座れない、バスに乗れないという不利益な結果に至る可能性は高くなる。また、バス停が混雑すると、バス待ち行列の最後尾を見つけることは困難になってくる。このため、混雑度が高いほど割り込み者率が高くなったと考えられる。しかし、今回の観察では、混雑度が低く、バス待ち行列の最後尾に並ぶことに不利益がほとんどない状況でも割り込みが発生するという事例がいくつかあり、それによって、混雑度と割り込み者率との相関が低くなっている。今回観察された割り込み行動には、バス待ち行列の最後尾に並ぶことに伴う不利益を避けるということ以上の機能があるようである。

図 8 は「割り込みをした人」のうち、「割り込み先の人とのコミュニケーションが認められた人」の割合を表している。「割り込みのした人」の 69% (42人中 29名) について、割り込み先の人との会話、身体的接触等が認められた。

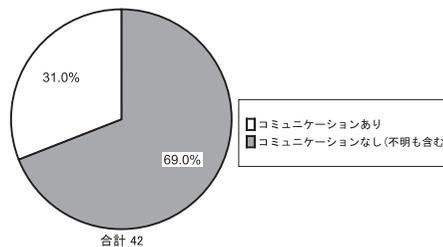


図 8 割り込み者相互間のコミュニケーション

この結果は、今回観察された割り込み行動の割り込み先の多くは割り込み者の知人または友人であった、ということを示している。したがって、今回観察された割り込み行動の多くは、「バス待ち行列の中から知人、友人を探し出し、そのそばに行く」という行動であり、「知人、友人から好意的に受け入れられる」という好ましい結果をもたらす機能を持っていた、と分析できると考えられる。

(考察)

観察全般に関して

全体としての割り込み率が8%、事例件数は42件であった。この数字に関する解釈は人によって異なるであろうが、10年ほど前、同一地点を観察したことがあったが、今回よりも割り込み事例は少なかった。また当時の同時期に目的の箇所ですべた某女子大も観察したが、列の並びは整然としており、割り込み事例はその観察時には見られなかった。感覚的には過去に比べると割り込み事例は増えているように思える。また、今回の観察事例では、割り込む際にも悪びれた様子はなく、ごく自然に当然のごとく割り込んでいるのが印象的であった。また今回観察の対象となっていないが、喫煙も散見され、また列が整然としていないこともあった。

分析結果に関して

今回の分析結果に関して言えることは、割り込み行動は、友人と話すことが目的で自ら選択して、もしくは友人からの誘いによって生じているということである。某女子大へのアンケートとも合わせて考えると一般的に割り込みの動機は、前のバスに確実に乗りたいから、座りたいから、友人と話したいから（約束をしていたから）などであるが、今回の結果からは友人と話したいからが最も強い理由であろう。すなわち今回の観察で多く見られた割り込みのパターンは、行動分析的に記述すると、「知人の姿を弁別刺激、知人とのコミュニケーション（会話など）を強化子として自発された知人の側に行くという行動が、結果として割り込みになっている」となる。「バスに乗ることができること」または「席に座ることができること」以上に、「知人とコミュニケーションがとれること」という強化子の強化力が強いということである。すなわち、知人とのコミュニケーションを第一に考えて、公共性、他者への迷惑、他者からどう見られるかなどを考えなかった結果により生じている、と言える。これを図示すると図9になる。この→がほとんど瞬時で行われていることが問題なのであろう。



図9 割り込みはなぜ生じるか

ところで、今回の観察対象地点の特殊性として、大学の敷地内であること（第三者の目が少ない）、乗客のほとんどが同性の集団に限定されること（他者の目を意識することが少なくなる）、そして割り込まれた方にも割り込み行動を容認するもしくは積極的に抗議しない姿勢（傍観者効果³が生じる）が存在するなどの環境要因が考えられる。このような環境要因が割り込み行動を抑止しない遠因ともなっている。従って、今回の行動のみから割り込み行動者は規

3 いじめなどに見られる現象で、いじめに参加しなくても関わらないようにと傍観することが行動を促進させる効果

範意識が少ない、他者への配慮が乏しいと断定することはできない。

なぜ割り込み行動が生じるのか

心理学ではこのような行動が生じた場合には、社会考慮（吉田 2000 個人の生活空間を社会として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度）の不足、個人志向性⁴（自分自身の内的基準への志向性）、公的自己意識（他者からどのように見られているのか）の不足などによって説明しようとしている。また、周囲から評価される自己への評価結果（自己評価の低下）への考慮不足なども考えられよう。またさらに一般的な説明としてモラルの不足や時代背景として自己チュー（個人志向性と同義か）などで説明しようとする。確かにそのような構成概念による説明も可能であろうが、あくまで推測の域を出ていない。むしろ、友人とのコミュニケーションをとりたいと思うと、他者への配慮等を忘れストレートに行動に移す点が行動の背景にある。「列に割り込む」以外に、「狭い通路でも横に並んで歩く」や「授業中の私語」も、「知人とのコミュニケーション」が強い誘発要因として機能していることによって発生している他者への迷惑行動であると考えられる。簡単に言えば動機に関して

友人とのコミュニケーション>他の行動（及び行動結果）

が他者への迷惑行動の原因である。迷惑行動とは断定できないが、「携帯電話を人前でかける」などにも同様な原理が働いていると言える。

他者への迷惑行動を防ぐために

今回の観察対象地は大学の敷地内であるにもかかわらず、並び方の指導や割り込み行動を規制する張り紙など一切存在しない。もちろん職員等の監視、規制、指導もない。本気で割り込み行動をなくそうとするならば、割り込み者の社会規範の少なさやモラル意識の乏しさなどもあくまで推測であるので、抽象的な標語を唱え規範意識の向上に訴えただけでは効果は少ないであろう。

割り込み者が割り込み先で歓迎されなかったり、割り込み先から少し離れた人が迷惑に感じているということを割り込み者にすぐにフィードバックすることができれば、知人のそばに行くというタイプの割り込みは減ると考えられる。そのような状況をどうやったら作り出すことができるであろうか？まずは立て看板が考えられる。その場所で割り込み行動が容認されていないという環境を作ることが大切である。そして、直ちには効果が期待できないであろうが、看板を見ることによって自分の行動を振り返って、公的自己意識を高めることができるかもしれない。また、割り込みが生じるたびに注意をする、罰則を設けるなども導入に議論が必要であろう。並ぶところにテープを貼る方法も、整列するためには効果があるかもしれないが、割り込みはまたいでしまえば終わりであるので効果は少ないであろう。ウィッカーたち（1994）のようにチェーンを張って割り込みできないように列を形成させる（銀行のキャッシュカードの列のように）ことも割り込み防止にはなるが、導入は議論を呼びそうである。

4 反対は社会志向性であり自分の周囲の他者への調和などを考えないことである

文 献

- 相川充 1997 対人関係能力向上の手だて 名古屋大学教育学部紀要(心理学) 44, 17-24
- 大坊郁夫 1994 公共場面における非社会的行動の研究：女子学生の認知傾向 日本心理学会第58回大会発表
論文集, 84
- 岩淵千明・小牧一宏 1997 授業規範：反規範行為への規範意識 日本社会心理学会第38回大会発表論文集
342-343
- 水田恵三 2000 援助行動への生態学的アプローチ 高木修監修 援助とサポートの社会心理学 北大路書房
- Ross, L., 1977 The Intuitive Psychologist and His Shortcomings : Distortions in the attribution process,
Berkowitz, L. (ed.), Advances in Experimental Social Psychology, vol. 10
- 吉田俊和 安藤直樹 他 1999 社会的迷惑に関する研究(1)名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 532-73
- 石田靖彦 吉田俊和 他 2000 社会的迷惑に関する研究(2)名古屋大学教育学部紀要(心理学), 47, 25-33
- 吉田俊和 元吉忠寛 他 2000 社会的迷惑に関する研究(3)名古屋大学教育学部紀要(心理学), 47, 35-45
- Wicker, A.W. 著 安藤延男監訳 1994年 生態学的心理学入門 九州大学出版会